

<pour + 時間>の意味と FLE の文法記述上の考察

Quelques réflexions didactiques sur l'enseignement/ apprentissage des expressions de la durée – les cas de 'pour + N'

平 嶋 里 珂
Rika Hirashima

L'expression de la durée 'pour + N' compte, à côté des trois expressions de la durée 'pendant + N', 'en + N' et 'depuis + N', parmi les contenus indispensables à acquérir de la grammaire du FLE au niveau intermédiaire. L'emploi de 'pour + N' repose sur l'équilibre de divers éléments linguistiques et énonciatifs. Les informations fournies par la linguistique doivent être présentées avec efficacité à l'aide de divers moyens méthodologiques (comparaisons, reformulations, paraphrases et schèmes) utilisés dans la description grammaticale du FLE.

キーワード：

Expression de la durée, grammaire du FLE, moyens méthodologiques
期間の表現、外国語としてのフランス語文法、方法論的手段

1. はじめに

意味論の影響を受ける現在の FLE (=外国語としてのフランス語教育) の文法教育では、「時間の限定 (indication temporelle)」は重要な学習テーマである。直説法複合過去形と半過去形の使い分けのように、時間表現と動詞時制形との共起は FLE の文法学習上の問題となるため、避けることのできない学習要素である。しかしながら、日本で作られた文法書には<前置詞+時間>で構成される時間表現を学習項目として取り上げているものはほとんどみられない。また、フランスで作られた多くの中級文法書は「時間の限定」に関して相当の紙面をさいているが、その記述には規則の単純化がもたらす記述上の矛盾が散見される。昨今の FLE の学習では文法学習にかかる比重は軽くなっているが、文法能力が運用能力の足場であることには変わりはない。日本における FLE の文法教育の充実を図るためにも、日本人学習者に向けた文法記述の方法を模索していくべきであろう。

<前置詞+時間>で表す時間表現については、Hirashima (2023 年刊行予定) が FLE の中級

文法で使い分けが習得項目に入るもののうち、〈pendant + 時間〉、〈depuis + 時間〉、〈en + 時間〉の記述内容の問題を扱っている。本研究ノートでは、前記3点の継続表現としばしば比較される〈pour + 時間〉の記述の問題を扱う。まず、フランスで作成された中級文法参考書4点 *Grammaire vivante du Français* (1987), *Le français au présent - grammaire-* (1987) traduit en japonais (2000), *Grammaire pour l'enseignement / apprentissage du FLE* (1996), *Nouvelle Grammaire du Français* (2004) の記述を言語学分析から得られる情報を参照して見直し、これらの継続表現の特徴と使い分けの問題となる言語学上の条件を整理する。その上で学習者の理解を促す記述上の方法論の可能性を探っていきたい。なお、本文中では便宜上、上記4点の文法書を文法書A、B、C、Dと記述する。

2. 〈pour + 時間〉に関する言語学情報の整理

文法書Bのように〈pour + 時間〉が表す継続時間の特徴について特に定義を与えていない文法書もあるが、CとDは前置詞の後に数量化される時間 (ex. *trois jours, deux ans*) および時期 (ex. *le week-end*) の表現を伴い、予定された継続時間を表すと記述している (C: p. 147, D: p. 263)。また、Aは動詞の行為が行われる時に継続時間が過ぎ去っていない場合、〈pendant + 時間〉の代用として〈pour + 時間〉を用いると補足説明を添えている (A: p. 208)。

〈pour + 時間〉で表される継続時間は、〈depuis + 時間〉のように発話時点と結びついていないため、時間区分的には、過去・現在・未来のいずれの区分でも使うことができる (ex. *Il partait / est parti pour deux jours; Il part pour deux jours; Il partira pour deux jours*)。Pourに後続する時間は数量化された期間 (ex. *deux mois*) または期間を含意する名詞 (ex. *le week-end*) である。事柄と期間の関係については、〈en + 時間〉や〈pendant + 時間〉が事柄が継続した実時間を表すのに対し、〈pour + 時間〉と事行¹⁾の関係は事柄が実現する時間によって2つに分かれる。事柄が未来時に行われる場合 (ex. *L'année prochaine, j'irai en France pour un mois.*)、〈pour + 時間〉は事行が実現する時点に開始され、pourに後続する期間継続するものと予想されている。事柄が現在時において実現している場合 (ex. *Il est parti pour deux jours.*)、動詞の行為が実現した時点からpourに後続する期間がカウントされるが、発話時においてその期間の一部分はまだ経過していない:

1. Il est parti pour deux jours. (=il est absent en ce moment)

例文1では partir という行為が行われることによって期間はすでに開始されている。しかし発話時点では2日間は経っておらず、文の主語は今も «être parti» の状態、すなわち発話者がいる場所を不在にしている状況であると解釈できる。

文脈によっては < pour + 時間 > で示される期間が発話時点においてすでに過ぎ去っていると考えられる場合もある。このような場合 < pour + 時間 > に結びつく事行は直説法半過去形あるいは大過去形で示される:

2. L'été dernier, je n'ai pas pu voir Pierre à Paris. Il était parti en Angleterre pour un mois.

この例文は昨年の夏 (l'été dernier) の出来事を語っているので、発話時点において Pierre の不在期間 (un mois) がすでに経過しているのは明確である。しかし、発話で語られているのは過去の一時点の状況なので、話者が Pierre に出会えなかった昨夏の時点では 1 ヶ月の滞在予定はまだ過ぎていないものとして示されている。

< 前置詞 + 時間 > で構成される時間表現については、動詞時制形や事行との共起性がしばしば問題視される²⁾が、< pour + 時間 > についても、組み合わせられる事行のアスペクトタイプや動詞の語彙的意味に制約があることが指摘されている。今回分析対象とした文法参考書では、A が < pour + 時間 > は完了動詞³⁾と共に用いられること (p. 170)、C は < pour + 時間 > が行為の成就を前提としているため、未完了動詞とは共起しないことを述べている (p. 147)。さらに言語学分析では、< pour + 時間 > が使用できない条件として「未来を示す要素を含まない文脈」(朝倉 2002: p. 408)、および「動作が全期間にわたることを表すような文脈」(朝倉 1984: p. 85) が上げられる。後者の例として朝倉 (1984) は être の複合過去形、動詞 rester や séjourner を紹介している:

3. *J'ai été à Paris pour deux mois. (朝倉 2002: p. 408)

4. Vous comptez rester combien de temps (*pour combien de temps) en France?

(*ibid.* [*部分は筆者])

(*être à Paris*)、(*rester*)、(*séjourner*) はすべて未完了の事行であり、ここまでの指摘を総合すると未完了アスペクトの事行、特に強い状態性を表す事行は < pour + 時間 > と共起しないように思える。しかし、実際には文法書に掲載される例文には < pour + 時間 > が未完了アスペクトの事行と共に使われているものが少なくない:

5. Il est à l'hôpital depuis deux mois et sans doute pour de nombreuses semaines encore!
(A: p. 208)

6. Les Boli sont absents pour tout l'été. (C: p. 147)

7. Le château est fermé aux visiteurs pour deux ans en raison de travaux de restauration.
(D: p. 263)

この点について市川 (2018) は、朝倉 (1984) にも <pour + 時間> が未完了の事行と共起している例が複数ある (ex. *La naissance du bébé est prévue pour la fin du mois de septembre.* [朝倉 1984: p. 85]) ことを指摘し、事行のアスペクト的性質に関わらず、継続時間の開始時点から期間内に事柄が終了することが文脈上示されれば、未完了動詞も <pour + 時間> と共起可能であると述べる (pp. 63-64)。取り上げた例文については、(*être prévue*) は未完了アスペクトに分類されるが、pour に後続する期間 (la fin du mois de septembre) に子供が誕生することによって事実上事柄は終了する。市川 (ibid.) はさらに、動詞の行為が期間全体にわたるように思われる場合でも、事柄が行われる時点と <pour + 時間> の後の期間で時間の質が異なったものとして受け取られていれば <pour + 時間> と状態性の高い事行は共起可能 (ex. *Tu es pour longtemps ici?* [朝倉 1984: p. 85]) であるという (p. 64)。

たしかに「事実上の事柄の終了」と「<pour + 時間>以降の時間の質的变化」は前述の例文 (5~7) の許容性を説明できそうである。5~7の事行 (*il, être à l'hôpital*)、(*les Boli, être absents*)、(*le château, être fermé*) はいずれも臨時的に継起する事柄であり、pour に後続する期間の終了に伴い終了することが自然に理解される。事柄の終了後には、5では病気の回復、6では Boli 家の帰宅、7では城の見学再開という新たな局面が開かれる。市川 (ibid.) が上げた前述の朝倉 (1984) の例文 (*Tu es pour longtemps ici?*) についても同様の解釈が可能になる。この発話は知り合いになった相手にいつまで滞在するのかを問うもので、返答の例として *Je suis ici pour deux mois.* が想定される。対話の前提には (*être ici*) が仕事あるいは学業等のために意識的に行われた行為と捉えられ、期間終了後には別の生活が待っていることが含意される⁴⁾。

3. 理解しやすさを促進するための記述上の方法論

Beacco (2010, p. 216) は文法記述の分かりやすさを保証する手段として、比較、言い換え、図式化、例文の分かりやすさ等を上げている。実際に、多くの文法書は <前置詞 + 時間> で構成される複数の継続表現を比較し、あるいは別の表現による言い換えにより間接的にその意味を明らかにする方法論を用いている。

3.1 比較と言い換え⁵⁾

FLE の学習者は <pour + 時間> を <pendant + 時間> と混同する傾向があり、文法書はしばしば2つの表現を比較してそれぞれの特徴を明らかにしている。文法書 D は比較と言い換えを用いて、pour に後続する期間が基準点において過ぎ去っているか否かの違いを強調している：

8. Elle est partie pendant trois semaines. (=elle a été absente: durée)

9. Elle est partie pour trois semaines. (=elle sera absente: durée prévue) (D: p. 263)

さらに、実際の継続時間を表す場合は＜pendant + 時間＞を用いることを注意喚起している (ibid., p. 263)。

文法書 C では＜pour + 時間＞＜en + 時間＞＜pendant + 時間＞が比較され、それぞれ指向する現実が異なることが例示される：

- 10a. Pierre est parti en cinq minutes.
b. Pierre est parti pendant dix jours.
c. Pierre est parti pour dix jours. (C: p. 147)

例文 10a は Pierre が出発に費やした時間、10b では出発し不在にした時間がそれぞれ示される。10c では Pierre が出発して発話時点において不在であり、直に戻ってくるのが期待されていることが暗に示される (ibid., p. 147)。

＜pour + 時間＞で表される期間は自然な日本語で訳出するのが困難である。そのため、期間を表す他の表現を含む発話と比較し、それぞれの発話が表示現実が異なることを示すことによって表現の特徴を明らかにする方法論は、＜pour + 時間＞の文法記述としては効果的だと言える。

付け加えて言うならば、＜pour + 時間＞を確認する基準点が過去にある例文も提示した方がいいだろう。FLE の学習者は言語で表された事象と現実の状況を混同する傾向がある。例えば「まだ決心がついていない」という状況はフランス語で *Je n'ai pas encore décidé.* というが、事柄が現在の状況を反映しているため直説法現在形で表すことができる (*Je ne décide pas encore*) と考える学習者は多い⁶⁾。学習者のこのような傾向を考えれば、例文 2 で示したように、現実の世界で期間がすでに経過している場合は＜pendant + 時間＞を用いると誤解する可能性がある (ex. **L'été dernier, je n'ai pas pu voir Pierre à Paris. Il est parti en Angleterre pendant un mois.*)⁷⁾。しかし、基準点が発話時点と過去にある 2 つの例文を比較することにより、実際の期間が経過していても、話者の視点が過去に移動していれば＜pour + 時間＞が使えることが分かりやすく示される：

11. Hier je n'ai pas pu voir Pierre à Paris. Il est parti en Angleterre pour un mois.
(発話時点で 1 ヶ月は経過していない)

- 12.=2. L'été dernier, je n'ai pas pu voir Pierre à Paris. Il était parti en Angleterre pour un mois.
(話者が Pierre にパリで会えなかった昨夏の時点で 1 ヶ月は経過していない)

3.2 図式化 (シエマ) の活用

発話言語学の影響を受けた動詞時制形の研究では過去～現在～未来と進む時間軸を左から右に進む直線で表し、その線上に、発話時点と事柄の時点、事行内部の特徴を符号化して図式的に表すことが多い⁸⁾。認知言語学では多様な意味を持つ語の基本構造をイメージスキーマとして表し言語学習への活用も行われている⁹⁾。図式化することで、語ないし表現の意味を構成する複数の特徴は空間的に構造化されて表されるため、言葉による文法記述を補完するメタ言語機能を持つと言える。Lachet (2013) のように FLE の文法教育研究で動詞のアスペクト的性質を図式化しているものは見られるが、一般の文法書では図式化を文法記述に活用しているものは多くない。Un Niveau Seuil (1976) の時間の限定 (détermination temporelle) の記述で事行の展開局面と時間表現を図式化したもの (p. 269) が見られるが、図式は決して分かりやすいものではなく一般の文法書には応用されていない。今回の分析資料である文法書については、文法書 C が < depuis + 時間 > の起点と発話時点との関係を時間軸上に明示している (C: p. 143) が、< pour + 時間 > の図式化はどの文法書にも記述されていない。本節では、2節で整理した < pour + 時間 > で示す期間の特徴、特に基準点と発話時点との関係を図式化してみたい。

1節で見たように < pour + 時間 > で表す期間は事行の継続時間と重なる。類似表現の < pendant + 時間 > < en + 時間 > と異なるのは、事柄を確認する時点 (発話時点あるいは過去・未来の基準点) において想定される時間が経過していないという点である。この違いを例文 10a ~ 10c で図式化してみよう。

図 1

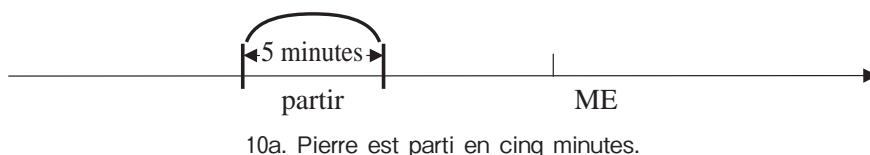


図 2

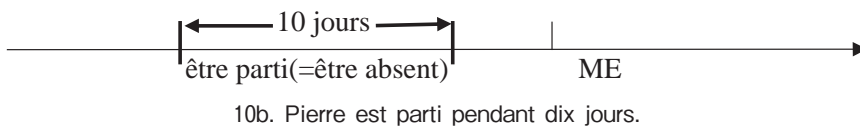
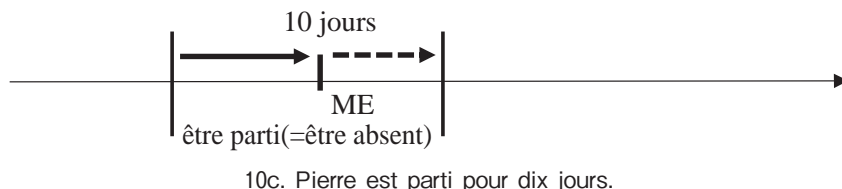
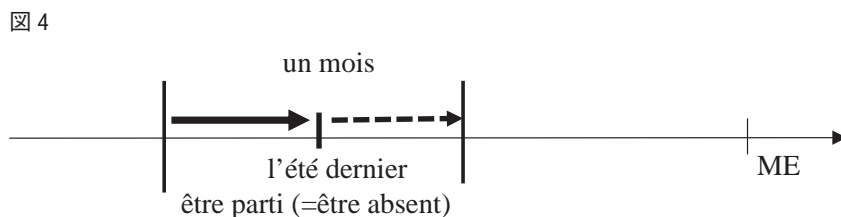


図 3



図式化すると < pendant + 時間 > < en + 時間 > と < pour + 時間 > が発話時点と異なる関係を築いていることが一目瞭然である。前 2 者の事柄の継続時間は発話時点において過ぎ去っているが、後者については、発話時点は < pour + 時間 > の期間内に存在する。発話時点より未来時における事柄の終点は予定されているものの、発話時点においてはなお継続中である。

< pour + 時間 > の期間が発話時点において過ぎ去っている場合の発話についても図式化してみよう。



2. L'été dernier, je n'ai pas pu voir Pierre à Paris. Il était parti en Angleterre pour un mois.

この図では、過去の基準点 (l'été dernier)、過去の予定された期間 (pour un mois)、発話時点の関係が明らかになることで、Pierre がパリを不在にした期間は発話時において過ぎ去っているものの、昨夏の時点では継続中だったことが判然とする。

4. おわりに

本稿では < pour + 時間 > の意味的特徴を言語学的知見を活用して整理し、日本人学習者に < pour + 時間 > の機能を分かりやすく記述するための方法論を紹介した。FLE の文法記述で多用される「比較」は、類似した期間の表現との違いを明確にすることによって、FLE に限らず外国語の文法記述の効果的な方法であることは間違いない。ここに、今回筆者が提案した「図式化」を加えることにより、様々な期間の表現の言語構造を視覚化することが可能になり、FLE の文法記述はさらに充実するだろう。一方で、< pour + 時間 > と共起しうる事行のタイプの記述については、アスペクト分析以外の基準を加味する必要があることが分かった。今後は rester や séjourner と < pour + 時間 > がなぜ共起できないのかを être との比較によって明示できるような解説が可能か等、フランス語学と FLE の文法教育をつなぐ研究の拡充も必要になるだろう。

注

- 1) 動詞 + 補語で表される行為・状況を事行 (procès) と言う。
- 2) 繰り返しを含意しない IMP が行為の終点を明示する < pendant + 時間 > と共起しないこと、< en

- +時間>と共起するのは事柄の終点を含意する事項のみであること等があげられる。
- 3) 完了動詞 (verbes perfectifs) は動詞の意味内容に事柄の終点を内包する動詞であり、行為が成就した後、同じ行為を繰り返すことができない (ex. *arriver*)。未完了動詞 (verbes imperfectifs) は動詞の意味内容に事柄の終点が含まれず、理論的には半永久的に行為を継続することが可能であり、いったん行為が中断されても、行為を再開することができる (ex. *parler*)。
 - 4) 市川 (ibid.) は *rester* や *séjourner* を用いる文には <pour + 時間> 以降の時間に質的時間の変化が含意されないため許容度が低いと判断している (p.64) が、動詞 *rester* については、事柄の一時性を明示する文脈があると <pour + 時間> と共起可能と考える (ex. *J'irai à Paris le mois prochain. J'y resterai pour deux mois.*) インフォーマントもいる。
 - 5) Hirashima (2023 刊行予定) には <pendant + 時間>, <depuis + 時間>, <en + 時間> の記述上の方法論が紹介されている。
 - 6) *Je ne décide pas encore.* は非文法的な発話ではないが、発話時点において事行 (*décider*) が未だ存在しないことを示しており「まだ決めるつもりはない」というニュアンスになる。「まだ決心がついていない」で表されているのは (*décider*) が発話時点までに起こっていないという事実確認である。この誤用例については Hirashima (1999) を参照。
 - 7) 筆者が授業担当した学習者の発話に同種の誤用が見られた。
 - 8) 時間軸上に事行を位置づけてるものが一般的だが、Desclès (1991) では事行の認知的シエマが用いられている。
 - 9) 例として Dewell (1994) の *over* の空間的意味の研究が上げられる。

参考文献

- 朝倉季雄 (1984). 『フランス語文法メモ』東京. 白水社.
- 朝倉委雄 (2002). 『新フランス文法事典』東京. 白水社.
- 市川雅巳 (2018). 予定の時点・期間を示す *pour*—現代フランス語における動詞の語彙的な共起制約— 熊本大学文学部論叢. 第109号. pp.61-64.
- Beacco J.-C. (2010). *La didactique de la grammaire dans l'enseignement du français et des langues*. Paris. Didier.
- Callamant M. (1989). *Grammaire vivante du Français nouvelle édition*. Paris: Clé International.
- Conseil de l'Europe (1976). *Un Niveau-Seuil*. Paris. HATIER / Didier.
- Delatour Y. et alii. (2004). *Nouvelle Grammaire du Français*. Paris: Hachette.
- De Salins G.-D. (1996). *Grammaire pour l'enseignement / apprentissage du FLE*. Paris: Didier/Hatier.
- DESCLÈS, J.-P. (1991). Archétypes cognitifs et types de procès, *Travaux de linguistique et de philologie*, 29, Strasbourg-Nancy, pp.171-195.
- Dewell R. (1994). Over again: Image-schema transformations in semantic analysis. *Cognitive Linguistics*, 5: 351-380.
- Hirashima H. (1999). Enseignement / apprentissage des temps verbaux dits «passés» et ses problèmes chez des étudiants japonais. Thèse de doctorat. Université Stendhal-Grenoble III.
- Hirashima R. (2023刊行予定). Quelques réflexions didactiques sur l'enseignement/apprentissage des expressions de la durée – les cas de '*pendant* + N', '*en* + N' et '*depuis* + N'. *Revue japonaise de*

didactique du français, 18.

Lachet C. (2013). Des savoirs scientifiques aux savoirs scolaires: entre élaboration des connaissances et élaboration du discours. Application à l'aspect verbal. *Lidil*, 47: 99-122.

Monnerie-Goarin A. (2000). *Nazo-ga tokeru furansugo bunpo* (version japonaise de *Le français au présent - grammaire-*). Tokyo: Daisan-shobô.

